

プロクロスとヘーゲル(一) —ヘーゲルによるプロクロスの「一」の解釈—

(哲学教室) 岡崎 文明

梗概

序論……………(二)

- 〔一〕問題提起
- 〔二〕ヘーゲル『哲学史講義』のプロクロスの項の構成
- 〔三〕ヘーゲルによるプロクロスの紹介
- 〔四〕プロクロス哲学の特徴—「一の弁証法」—

註

- 第一章 プロクロスの基本思想—ヘーゲルによる解釈—……………(四)
- 〔五〕「一と多」の問題の由来
- 〔六〕『バルメニデス篇』の「第一の仮定」
- 〔七〕右における「一」—新プラトン主義の「善一者」の先駆
- 〔八〕ヘーゲルは『バルメニデス篇』の「第一の仮定」の「一」を「純粹な概念」と解釈
- 〔九〕「純粹な概念」としての「一」は「一般的概念」(『『普遍的概念』)
- 〔一〇〕プロクロスにおいては「一」は実在、「多」は「一」に解消

- 〔一一〕プロクロスにおける「一」と「多」
- 〔一二〕プロクロスにおける第二段階—多—存在者—実在者—思想
- 〔一三〕常識からの反論—物体は実在するが思想は実在せず
- 〔一四〕ヘーゲルの論評—プロクロスと常識は水掛け論争

註

- 第二章 プロクロスの「一」と「多」に関するヘーゲルの解釈……………(八)
- 第一節 発出と帰還……………(八)
- 〔一五〕「一」の自己発展—多の発出
- 〔一六〕「一」からの発出と帰還—から「善一者」の名称が由来
- 〔一七〕多の発出に関するヘーゲルの解釈
- 〔一八〕多の発出—思想の産出—に滞留

註

- 第二節 否定と止揚……………(二二)
- 〔一九〕「第一の仮定」の「否定」のプロクロスの解釈(1)
- 〔二〇〕「第一の仮定」の「否定」のプロクロスの解釈(2)
- 〔二一〕「第一の仮定」の「否定」のプロクロスの解釈(3)

- 「二二」 「第一の仮定」の「否定」のヘーゲルの解釈
 「二三」 「否定」のプロクロスの解釈とヘーゲルの解釈
 「二四」 弁証法的「否定」の止揚

註

第三節 「多」の発出 ……………（一四）

「二五」 「一」からの発出は「欠乏」による「欲求」が原因ではない

「二六」 「一」からの発出は「可能性・力の充溢」による

「二七」 「一」からの発出は「一」の多様化

「二八」 「一」は多の創始者、自体的な多は存在しない

註

第四節 「多」における一 ……………（一六）

「二九」 多は一に似ていない一を分有している

「三〇」 単一者最初に一となったものの構成基本要素

「三一」 単一者多数ある一それ自体で一、本質的一

「三二」 働きの原因に等しいが、結果は原因に劣る

「三三」 単一者から生産されたものは本質的一ではなく、一を付帯しているにすぎない

註

結論と残る課題 ……………（一八）

「三四」 ヘーゲルはプロクロスを介してプラトンの否定神学からも弁証法を形成

「三五」 ヘーゲルの『哲学史講義』は今日も研究の指針となり得る

INHALT

序 論

「一」これまでの哲学史研究においてしばしばヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770-1831) とプロクロス (Proclus Diadochos, 412-485) の間に「精神の類縁性」のあることが指摘されてきた。¹⁾ではヘーゲルは、一体いつ頃プロクロスに初めて触れたのであろうか。W・バイアヴァルテスによると、いつ頃か正確に同定できないが「たぶんヘーゲルはプロクロスの知識をすでに持ってハイデルベルクにやってきたと思われる」。²⁾

ヘーゲルは一八一六年にハイデルベルクにやってきたのであるから、少なくとも四十代半ばにはすでにプロクロス哲学を知っていたことになる。また、「ヘーゲルはプロティノスよりもプロクロスを尊重し、とくに『神学綱要』を重大視している」ともいわれている。³⁾したがってヘーゲルはプロクロス哲学から何らかの影響を受けていると思われる。

しかし我が国ではその間の事情は十分に解明されているとは言えない。拙稿はこの不足を些かでも補わんとする試みである。具体的には、ヘーゲルがその著『哲学史講義』⁴⁾においてプロクロスの「一」を如何に解釈しているか、これをテキストに基づいて可能なかぎり明らかにすることを目的としている。

「二」同書においてプロクロスのために割かれた頁数はそれほど多くはない。⁵⁾これは内容的に四つの部分に分かれている。

その第一部は、⁶⁾プロクロスの生涯などを解説した「導入部」に相当する。第二部はプロクロス哲学の基本原理であり出発点でもある「一」(τὸ εἶς) についての、ヘーゲルの解釈である。第三部は、⁸⁾第二部を基礎にしてプロクロス哲学の τριάς (三一) についての、ヘー

ゲルの解釈である。そして第四部は、⁹⁾簡単な補遺的説明となっている。

『哲学史講義』の該当箇所から推察するに、ヘーゲルがプロクロスの重要な部分と見なしているのは第三部すなわち *truth* を論じた箇所であると思われる。しかし、*truth* を理解するためには、順序として「一」の理解が前提となる。それゆえ、拙稿では第二部の「一」に関するヘーゲルの解釈だけを扱うことにする。

「三」ところで、プロクロスは、今日の哲学史のみならずヘーゲルの哲学史によってもプロティノス (Plotinos, 205-270) の流れを汲む「新プラトン主義者」(Neuplatoniker) として位置付けられている。そしてヘーゲルは彼を『哲学史講義』の右記の「第一部」において次のように紹介している。

「プロクロスは極めて学究的な生活を送った。彼は深い思弁的な人であり、該博な知識を有していた。」¹⁰⁾

また、

「プロクロスは、いわば、神に仕え、学問と新プラトン主義の哲学に生きた。」¹¹⁾ (訳文中の傍点は筆者による。以下同様。)

そしてヘーゲルは、プロクロスの著作を紹介して

「特に活字になった書物は『プラトン神学』と『神学綱要』—プロクロスの主著—である。」¹²⁾

と述べ、とりわけ『プラトン神学』を「知性的な体系」¹³⁾であると評している。しかしこの『プラトン神学』には難解な箇所もあり、その叙述には不明瞭で欠点もお多いとしている。¹⁴⁾

「四」さて、ヘーゲルによれば、プロクロスの哲学は、プロティノス哲学と同様に「プラトンの註釈という形式」¹⁵⁾を持っているが、しかし「新プラトン主義を体系化し、形式的に完成した」という点では

プロティノス哲学と区別される。¹⁷⁾ その結果、プロクロスの主著『プラトン神学』に、プロティノスには明示的に見いだされなかったところの「理念における諸領域の明確な進展と区別」¹⁸⁾が見いだされる、とされる。したがってここからヘーゲルは、プロクロスが同書で特に関心をおいているものは「理念」であると解釈していることが分かる。

しかしながらヘーゲルによれば『プラトン神学』の主題は「一の弁証法」(Dialektik des Einen) であるとされる。するとこの場合「一」(das Eins/die Einheit) と「多」(das Viele) とが、そして両者の関係が問題となる。したがって、ヘーゲルはこの関係について簡潔に次のように述べている。

「多を一として、一を多として示すこと、また、一が受け取る諸形式を詳細に明らかにすることは、プロクロスには必然である。」²⁰⁾

しかしながらヘーゲルは「この弁証法はいくぶん表面的に進み、また最高に骨の折れるものだ」ともいっている。²¹⁾

それでは以下において、この骨の折れるまた退屈な「一の弁証法」—「一の形而上学」あるいは「一の自然神学」—を見ていくことにしたい。

註

- (1) W. Beierwaltes, *Platonismus und Idealismus*, (Frankfurt am Main, 1972), S. 154 & Fußnote 1.
- (2) *ibid.*, S. 157, Fußnote 10.
- (3) *ibid.*,
- (4) 拙稿では G. W. Hegel, *Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie II*, Eurobuch 2 (Weberlin, 1984) を使用
- (5) 同書二八四から四〇〇頁の一六、七頁に過ぎない。

- (6) Hegel, *op. cit.*, S.384,Z.28-S.386,Z.18
ebd., S.386,Z.19-S.390,Z.19
- (7) *ebd.*, S.390,Z.20-S.399,Z.29
- (8) *ebd.*, S.399,Z.30-S.400,Z.12.
- (9) *ebd.*, S.385-386, Proklus führte ein äußerst gelehrntätiges Leben; er war ein tiefer spekulativer Mann und besaß den größten Umfang von Kenntnissen.
- (10) *ebd.*, S.386, Er lebte gleichsam im Gottesdienste, in den Wissenschaften und der neuplatonischen Philosophie.
- (11) *ebd.*, Besonders abgedruckte Bücher sind seine Platonische Theologie (*εἰς τὴν Πλάτωνα θεολογίαν*) und seine Philosophischen Elemente (*στοιχείωσις θεολογικῆς*)——Hauptschriften des Proklus.
- (12) *ebd.*, S.387, sie (= "Über die Theologie Platos") ist ein Intellektualsystem. ¹⁵用文中の(=)は筆者の補うものを(以下同様)。
- (13) *ebd.*, S.386, und sie (= "über die Theologie Platos") hat besonders daher viele Schwierigkeiten.
- (14) *ebd.*, S.387, ich will nicht sagen, daß seine Darstellung vollkommen deutlich——sie hat noch vieles Mangelhafte.
- (15) *ebd.*, Seine Philosophie hat, wie die Plotinische, die Form, Kommentierung des Plato zu sein……;
- (16) *ebd.*, S.386, Dadurch aber unterscheidet er sich ganz besonders von Plotin, daß bei ihm (= Proklus) die neuplatonische Philosophie wenigstens schon zu einer systematischeren Anordnung im Ganzen und ausgebildeteren Form gekommen ist.
- (17) *ebd.*, Er ist interessant, weil, in seiner Platonischen Theologie besonders, mehr (so sehr das Werk auch dialektisch ist) ein bestimmteres Fortschreiten und Unterscheiden der Sphären in der Idee sich findet; bei Plotin ist dies weniger der Fall. ¹⁶すなわち「第二段階を存在者」生命「知性の三つに区別」しかも三階構造を成していることを明確にした点を指している。

- (15) *ebd.*, In dieser Schrift beschäftigt er sich mit der scharfsinnigsten und weitläufigsten Dialektik des Einen;
- (16) *ebd.*, es ist ihm notwendig, das Viele als Eins und das Eins als Vieles zu zeigen, die Formen, die das Eins annimmt, darzulegen.
- (17) *ebd.*, Aber es ist eine Dialektik, die mehr oder weniger äußerlich geführt wird und die höchst ermüdend ist.

第一章 プロクロスの基本思想—ヘーゲルによる解釈—

[五] 「一と多」が哲学の諸問題のひとつとして自覚されたのは古く、既に古代ギリシアの初期のピタゴラス (Pythagoras, c. 530BC) 学派やクセノパネス (Xenophanes, c.570-c.475BC) に見出される。¹⁷この問は受け継がれ、パルメニデス (Parmenides, c. 475BC) を経てプラトン (Platon, 427-347BC) に至る。¹⁸そして、プラトンは「自らプラトンの哲学を受け継ぐと称する新プラトン主義者」に至る。

しかし新プラトン主義者が直接的に受容した「一」の思想はプラトンの『パルメニデス篇』 (Parmenides) からである。(歴史上のパルメニデスからではない)。そこから、ヘーゲルもこう述べている。

「プロクロスは、プラトンの『パルメニデス篇』においてとりわけ絶対的本質の本性が認識されていることを明確に見い出した。¹⁹」

[六] そこでヘーゲルは「一と多」の解釈をプラトンの『パルメニデス篇』から起こす。これは自然なことであろう。

プラトンの『パルメニデス篇』には「一」の思想が展開されている。とりわけ「第一の仮定」といわれる部分が重要な意味を持つて

いる。『パルメニデス篇』の一三七cから一四二bにおいて、「もし一があれば、その一はXではない」という定式が作られ、このXの探究が展開されている。かかる定式が「第一の仮定」と呼ばれるものである。

この探究法は、一般的に言えば「ある事柄を仮定して、そこからどのような帰結が出てくるかを検べる」方法であり、『パルメニデス篇』では、パルメニデスの弟子ゼノン(Zenon, c.450BC)によって案出されたと言われている。

「七」さて、『パルメニデス篇』の同箇所ではまず、ほぼ十一のものの(全体と部分、限定、形、存在、動、静、同と異、似と不似、等と不等、年上と年下、一なるもの、など)がXの候補にあげられ、逐次問答法によって吟味され、その結果、これらのすべてには、論理的矛盾があるとして「一」から退けられている。³⁾

そして最後に、次のような結論が出される。⁴⁾かかる「一」は「存在しない」「何も所有しない」「名もない」「説明もできない」「知識もない」「感覚もない」「思惑もない」ものである。

かかる「一」はわれわれの常識をはるかに越えたものとして現れているが、実はこれが、古代の新プラトン主義(プロティノスからプロクロスに至る系譜)において万有の根源である「善一者」として解釈されていくのである。

「八」かかる「一」は『パルメニデス篇』では「純粋な概念」として扱われていて、我々の身近にある何か感覚的なもの、あるいは物質的なものをモデルに想定して示しているのではない。それゆえヘーゲルは『哲学史講義』のプラトンの項でこう述べている。

「他の対話篇は純粋な思想の問答法を描いている。たとえば『パルメニデス篇』である。……しかしその他にこれらの対象(『理

念)に関する対話篇がなおまだある。まさにそれらは純粋な思想を扱っているがゆえに、最も難解な対話篇に属している。すなわち『ソピステス』『ピレポス』そしてとりわけ『パルメニデス篇』もそれである。」⁵⁾(訳文中の丸括弧(『)は筆者の補い。以下同様。)

上記の箇所へヘーゲルは『ソピステス』『ピレポス』『パルメニデス篇』に登場する「一」と「多」、「存在」と「非存在」、「動」と「静」、「同」と「異」などをめぐる議論を「純粋な思想」といつている。これらは「純粋な概念」と同じと考えてもよい。なぜなら、これらはいずれも理念(『イデア』)を指しているからである。また、同書のプロクロスの項でも同じく次のようにいつている。

「プラトン自身のもとでは、これらの純粋な諸概念は、いわばこれらが直接的に持つている以上の広い意味を持たないで、とらわれなく登場している。へ、多、存在など、これらのもとでは、我々はまさしくこの直接的な一や多を思惟する。」⁶⁾

この箇所でもヘーゲルは、「一」「多」「存在」などは「純粋な概念」つまり「理念」(『イデア』)であると解釈している。したがって、これらに物的なあるいは想像的なイメージを纏わせて考えることはできないのである。

「九」さらに続けて次のように述べている。

「われわれはそれらを、われわれの思惟のうちにあるところの何か一般的な概念として定める。」⁷⁾

通常われわれは、思惟の内では、概念を「一般的なもの」として捉え扱っている。右の「一般的な」とは「普遍的な」という意味である。元々「概念」は思惟(『主観』)内の存在者であり、したがって「一般的」あるいは「普遍的」な性格を持つている。そして概念は「われわれ」にとつてはBeingに実在しているものではない。

「一〇」ところが、プロクロスにおいては事情が異なる。プロクロスでは「一」「多」「存在」などの諸概念はたんに「一般的」であるばかりではなく、「実在的」(in re)でもある。ヘーゲルの言い方を借りればこれらの諸概念は「絶対的本質」(das absolute Wesen)の表現である。ヘーゲルによればプロクロスの根本的思想は次のように解釈される。

「プロクロスは、プラトンの問答法に従って、すべての規定(『概念』)が、とりわけ多が、それ自身において如何に解体しかつ一向かつて帰還するかを示している。表われている(『通常の』)意識にとつて主真理のひとつは、多くの実体があるということ、あるいは、多(各々が一と言われたが)つて実体といわれる諸物)はそれ自体で真に存在するということである。――(しかしプロクロスにとつては)主真理はこの問答法において消滅していき、一のみが本質であり真実であつて、他のすべての規定は消失してしまう諸量に過ぎず諸要素に過ぎず――それらの存在は思想が直接的にあるようにのみある、ということが結果する。」(訳文中の「一」は原文では丸括弧である。以下同様。)

つまり、通常の意識にとつての真理は、世界には多くの物が「実体」として確固と存在し、しかも疑うことのできないような仕方で存在する、ということである。だがプロクロスによれば、これらの「多」は「一」(『万有の根源』一者)へと解消し、そのようにして「一」に帰還する。「多」は消滅するものに過ぎず、「一」のみが本質であり真理であるのである。

「一」プロクロスによると「多」は「一」から発出する。まず初めに「一」は万有の根源として、第一段階(thesis)としてある。次に発出して「一」は「多」となり「存在者」として確立する。次に「生命」として、その次に「知性」として確立する。この「生命」

や「知性」は宇宙生命、宇宙知性のようなものであつて直接的には人間の生命や知性ではない。これが第二段階である。第二段階では「存在者」「生命」「知性」の三者は *epistēmē* (三) をなしている。第三段階として「魂」が、そして第四段階として「物体」が発出する。¹⁰

第二段階以下を「多」という。多は「一」から離れるほど存在性を失い、逆に「一」に近づくほど存在性を得る。「一」に帰還すれば「多」はもはや「多」ではなくなり「一」となる。即ち「一」の下では「多」はもはや存在しない。このように帰還によつて多は消滅する。それゆえヘーゲルのいうように「一」にすべてが解消し、その結果「一」のみが本質であり、真理であることになる。

「一二」ところで、「多」はまず存在者―第二段階―の中にある。「存在者」は *ousia* であるから可能的に「知性」でもある。したがつて多は、「知性」のなかに、知性認識されたものとして、つまり諸イデア―諸理念―として、ある。したがつて理念は思想(『知性認識されたもの』)ということが出来る。それゆえ「多」は思想の中にあるようにあることになる。しかもこの理念は永遠に自己同一を保持しているもの、この意味では「存在者」の名に全面的に値するものであり、したがつて、かかる理念や思想こそ存在することになる(この考えはまさしくプラトンのものである)。

しかし、日常の考えはこれとちょうど逆であつて、物的な「多」―これはプロクロスでは第四段階に相当―があるように(あるいは「多」にならつて)「思想」があるわけで、プロクロスの考えではそうではないことになる。プロクロスの考え方はわれわれの日頃の常識(「表われている(『通常の』)意識」と逆である)。

「一三」それゆえ、かかる新プラトン主義的な考え方に当然、常識の側から反論が出される。これをヘーゲルは次のように述べている。

「われわれ(『常識人』)は思想にはどんな実体性もどんな固有の存在もあるとは見えない。すべての諸規定はそうであり、また物の諸規定は思惟におけるそのような諸契機である。――新プラトン主義者やプロクロスに終始変わらず異論が出され反論されることは常に次のことである。すなわち、思惟にとつてはすべてのものが一に帰着するであらう、がこれは思惟の一に過ぎず、しかしだからといってそこから決して、すべての現実的なものは現実的な実体ではないとか別々の互いに独立した諸原理を持つているとか、そして各々は別々の実体自体としてそれ自身で他から区別されているとか、にはならない、――かの論理的――は現実性の一ではなく、かの論理的一によって現実性の上で結論されることはできない、と。」¹¹⁾

つまり、我々の常識では、知性的にあるものは、それは思想や思惟や規定(概念)などであるが、これらはすべて実体性も固有の存在も持つてはいない。常識では実体性や存在を持つていものは物理的事物(『現実の物』――プロクロスでは第四段階に相当――である。論理的にはなるほど、多は一に還元されるが、しかしだからと言って現実もまたそうとは言えないのではないか、観念上の論理と現実とは同じではないのだから、この論理(観念)を現実の物(実在)にそのまま適用することはできない。これが、プロクロスに対する常識の側からの、いわば当然の反論である。

「一四」ヘーゲルはこの反論を次のように評する。

「つまり、この反論は常に事柄を再び初めから始める。現実的なものについては、それはそれ自体で何らかのものであると言つ。そしてもし人がそれについてそれは何であるかと言つなら、物、実体、一つのものであると言つ。――つまり、常に元通りのものが何かそれ自体で存在するものとして申し立てられはするが、

それはすでに消滅するもの、それ自体では存在しないものと(プロクロスによって)証明されているのである。」¹²⁾

ヘーゲルに言わせると、この反論はかみ合っていない。常識は、物、実体、一つのもの、などは概念とは無関係にそれ自体で存在すると主張するが、しかしプロクロスは既に、それらは消滅し、それら自体では存在し得ないことを証明している。¹³⁾

それゆえ、議論は最初に戻つてしまふ。つまり議論の地平は、常識には「物理的なもの」がその地平であるが、プロクロスには「純粹の概念」がその地平である。そして前者には「物理的なもの」が実在するのであつて、「概念」は十分には実在しない。これに対して後者には「概念」が実在するのであつて、「物理的なもの」は十分に実在するとは言えないのである。したがって両者はかみ合わず、水掛け論争に終わつていふ。

このように、プロクロスの基本思想である「一」と「多」は、ヘーゲルによつて、まことに正確に解説されていると思われる。では、次に各論に入ることにしよう。

註

(1) アリストテレスによると、ピュタゴラス学派のいわゆる「双欄表」(*dyotokia*)に、限と無限、奇と偶、一と多、右と左、男と女、静と動、直と曲、明と暗、善と悪、正方形と長方形、が列挙されており(Aristoteles, *Metaphysica*, 986a22-26)。これらの中で最も基本的なものとして「存在と非存在」(*to on to to mi on*)と共に「一と多」が挙げられている(*ibid.*, 1024b27seq.)。また、*ibid.*, 1072a32seq. 参照。クセノパネスはAristoteles, *Metaphysica*, 986b18-28参照。

(2) Hegel, *op. cit.*, S387, Im Parmenides des Plato fand auch ausdrücklich er besonders die Natur des absoluten Wesens erkannt.

- (3) 拙著『プラトンの『パルメニデス篇』における「第一の仮定」』（『専
根論叢』第二八七・二八八号）六五頁参照
- (4) Platon, *Parmenides*, 142a1-8. 及び上掲拙著『パルメニデス篇』
- (5) Hegel, *Vorlesungen*……, §53. Andere Dialoge stellen Dialektik
reiner Gedanken dar; so der Parmenides. …… Aber es sind
auch noch Dialoge über diesen Gegenstand übrig, die, eben weil
sie mit dem reinen Gedanken umgehen, darum auch zu den
schwersten gehören: nämlich der Sophist, Philobus und beson-
ders auch Parmenides.
- (6) *ebd.*, S.387, Bei Plato selbst treten diese reinen Begriffe un-
befangen auf, gleichsam ohne weitere Bedeutung, als sie un-
mittelbar haben. „Einheit, Vielheit, Sein“ usf., dabei denken
wir eben diese unmittelbare Einheit, Vielheit.
- (7) *ebd.*, Wir bestimmen sie etwa als allgemeine Begriffe, die in
unserem Denken sind;
- (8) *ebd.*, aber für Proklus haben sie eine höhere Bedeutung, sie
sind der Ausdruck des absoluten Wesens.
- (9) *ebd.*, Er zeigt nun nach der platonischen Dialektik, wie alle
Bestimmungen, besonders die Vielheit, sich in sich selbst
auflösen und in die Einheit zurückkehren. Was dem vorstellen-
den Bewußtsein eine seiner Hauptwahrheiten ist, daß viele
Substanzen sind oder daß die Vielen (Dinge, deren jedes ein
Eins heißt und so Substanz) an sich, in Wahrheit seien—die
Hauptwahrheit geht in dieser Dialektik verloren; und es
resultiert, daß nur die Einheit Wesen, wahrhaft ist, alle
anderen Bestimmungen aber nur verschwindende Größen, nur
Momente—ihr Sein so nur ist, wie ein Gedanke unmittelbar
ist.
- (10) 第一段階は善一者 *τὸ ἀγαθὸν ἓν* 第二段階は存在者 *τὸ ὄν*、
生命 *ἡ ζωὴ*、知性 *ὁ νοῦς*、第三段階は魂 *ψυχὴ*、第四段階は物
体 *τὸ σῶμα*。

- (11) Hegel, *op. cit.*, Einem Gedanken schreiben wir keine Sub-
stantialität, kein eigenes Sein zu; so sind alles Bestimmungen,
und die Bestimmungen eines Dinges solche Momente im Den-
ken.— Was den Neuplatonikern und dem Proklus beständig
eingewendet und entgegengehalten wird, ist immer dieses, daß
freilich für das Denken alles in die Einheit zurückgehe, aber
daß dies auch nur eine Einheit des Denkens ist, daraus aber gar
nicht folge, daß alle wirklichen Dinge nicht wirkliche Substan-
zen seien, verschiedene, voneinander unabhängige Prinzipien
haben, und selbst verschiedene Substanzen, jedes getrennt von
dem anderen an und für sich sei— jene logische Einheit nicht
eine Einheit der Wirklichkeit sei, von jener nicht auf die
Wirklichkeit geschlossen werden könne.

- (12) *ebd.*, S.387-388. Das heißt, dieses Widerlegen fängt immer die
Sache wieder von vorne an. Es spricht von der Wirklichkeit,
daß diese etwas an sich sei; und wenn sie von ihr sprechen, was
sie sei, so ist sie ein Ding, eine Substanz, Eins— kurz, sie
bringen immer das wieder als etwas Ansichseiendes vor, des-
sen Verschwinden, Nichtansichsein aufgezeigt worden ist.
- (13) Proklos, *Elementatio theologia*, prop. 1-20.

第二章 プロクロスの「一」と「多」に関するヘーゲルの解釈

第一節 発出と帰還

「一五」プロクロス哲学の組織体系は四段階を持っていた「一」。
ヘーゲルは、プロクロスがそうしているように、議論を第一段階の
「一者」から始める。

「プロクロスは一から始める。さて、そこから彼は再び前進する

が、直接に知性³⁾へ進展するのではない。むしろ彼にあつてはすべては大変具体的な姿を持つ。しかしこの「一の自己発展はプロクロスにあつてはプロティノスにおけるより以上に概念化されることはない。我々はこれを一度は放棄しなければならず、分裂のこの概念を探してはならない。」¹⁾

プロクロスは第一段階の「一」から探究を出発させるが、しかしただちに第二段階の「知性」(≡*noia*)へとは進まずに、むしろ、一かどのようにして多が発出するか、を探究する。

この場合プロクロスにおいては、多の生成としての「一の自己発展」は、プロティノス以上には概念化されていないと言われる。この意味はおそらく次の如くである。

プロティノスでは、最初、「一」は主客未分であるが、自分自身を振り返り省察し自覚するときに「一」は「知性」へと変化する。このときに「一」は「知性認識する自分」(認識主体)と「知性認識される自分」(認識対象)とに二分する。すなわち二となる。プロティノスはこのように「一の自己発展」を「二への分化・分裂」(*Entzweigung*)として概念化している。しかしプロクロスにはこれ以上の概念化はないと言う。

確かにプロクロスには「分化・分裂」というよりも「一体化」の考え方が強く「すべてのものはすべてのものの中にある」という原理が働いている。そしてこれはプロティノスには見られないものである。したがってプロクロスでは二分化・分裂の概念を探しても無駄なのである。

「一六」ところで、プロクロスにおいても第一段階である「一」「第一者」が最も重要である。これは彼の哲学の中核をなしている「万有の根源」であるからである。

「一、第一者が最も重要である。へ一なるものはそれ自体では言

表できず認識もできないが、それはその発出と自己帰還から理解される。」³⁾ (へへはヘーゲルによるプロクロスの思想のパラフレイズ。以下同様。)

これは一体どういう意味であろうか。「万有の根源」はそれ自体としては「一」でも「善」でもないところの「不可知のもの」で、したがって「名付けられないもの」であるが、万有の根源から「多」が発出してきた場合には、その「多」——これは可知のもの——からみればこの発出源は「一」と見える。

なぜなら発出源は少なくとも「多」ではない。(否定)からである。ここから発出源は「多」から見れば「一」(≡多の否定)と理解される。

また逆に、「多」が発出源に帰還する場合には、その「多」から見れば発出源は「善」と理解される。なぜなら、発出源は「多」の「目的」であり、目的は「善」の概念を持つからである。

このようにして「一」はそれ自体不可知であるが、「発出」と「帰還」を介することによって、あるいは否定的にあるいは間接的に、理解されて、「善一者」と名付けられ得るのである。

ここに万有の根源に関する字が「否定神学」として成立する根拠と可能性が見いだされる。

また、右からも解せられるように、「善一者」という名称は「われわれ」の側から万有の根源を見たときに「われわれ」が名付けた仮の名称であつて、「万有の根源」それ自体の本質が「善」であり「一」であることを表わしている本質的名称ではない。それゆえ、「善一者」という名称は第二段階以下の各名称とは質的に異なることに特に注意しなければならないであらう。

「一七」次にヘーゲルは「一」から「多」が発出する様子を分析する。

「プロクロスはこの自己二分化（自己分裂）、区別への関係、一の最近接規定を、進出（*παράγειν*）、発出（*πρόοδοι*）、活動、表現、指示として定義する。進出する一への関係は自分から外へ出ることでない、なぜなら外へ出ることとは一種の変化であり、変化は自分自身と等しくないものとなってしまうからである。それゆえ、一はその進出によって衰微あるいは減少を許容するものではない。一は、特定の思想を生産（*Erzeugung*）することによって衰微を被るのではなくて、同じものに留まりそして進出してきたものをも自分の内に保持する思惟である。」⁽⁴⁾

先に「一五」プロクロスでは「二分化・分裂」の概念を探してはならないといわれていたにもかかわらず、ここでは「自己二分化・自己分裂」（*Selbstentzweiung*）が述べられている。これは次に見る如く、進出、発出、活動、云々の意味である。具体的には第二段階の「発出」——「知性認識者」と「知性認識されたものども」との二分化——を意味している。

「一八」先に述べた如く「一六」、一は、それ自体としては、表現も認識も不可能であるが、この一から多が発出してくるときには、一について何らかの規定が可能となる地平（『第二段階以下』）が拓かれてくる。その規定を、プロクロスは、進出、発出、活動、表現、指示などと定義する。これらはすべて「一への関係」を表わしている。

多は一から発出（『進出』）してくるが、われわれの常識では、或るものの外へ発出してきたものは元のものから「分裂」し、そのために元のものとは異なり、その結果、元のもの量は発出したものの分だけ減少する（このような性質のものの例は、ちょっと考えただけでも「物体」であることがわかる）。

しかし、一から直接発出してきたものには、そのようなことは付

随しない。一は減少も変化も被らず、同一に留まりつつ、「多」（『思想』）を発出させる。そして外へ発出してきた多・思想は同時に一の内にも留まる（つまり一方的な「外へ」の発出ではない）。この意味でプロクロスの「二分化・分裂」は「元が減少衰微する二分化・分裂」ではない。むしろ、これは、「発出」——「思想の産出」——「一に滞留」と解さなければならぬであらう。⁽⁵⁾

「発出」がこのような在り方をするのは、「一」が物体ならざる万有の根源であるからに他ならない。

註

- (1) Hegel, *op. cit.*, S.388. Proklus fängt von der Einheit an; von da geht er nun wieder vorwärts, aber nicht unmittelbar zum *vorfort*. Sondern alles hat bei ihm eine viel konkretere Gestalt; die Selbstentwicklung dieser Einheit aber wird bei Proklus nicht eben mehr zum Begriffe gemacht als bei Plotin. Dies müssen wir einmal aufgeben, diesen Begriff der Entzweiung nicht suchen.
- (2) Emile Brehier, *Histoire de la philosophie I, Antiquité et moyen âge*, (Paris, 1981⁹⁷) p. 424. 'l'autre sur le principe que tout est dans tout.
- (3) Hegel, *op. cit.*, S.388. Die Einheit, das Erste ist die Hauptsache. „Das Eine ist an sich unaussprechlich und unerkennbar, aber es wird aus seinem Hervorgehen und Insichzurückgehen aufgefaßt“. / Proklus, *In theologiam Platonis II*, p.95.
- (4) *ibid.* Proklus bestimmt diese Selbstentzweiung, das Verhältnis zum Unterschiede, die nächste Bestimmung der Einheit, als ein Hervorbringen (*παράγειν*), ein Hervorgehen (*πρόοδοι*), Tätigkeit, Darstellen, Zeigen. Das Verhältnis der Einheit, welche hervorbringt, ist nicht ein Herausgehen aus sich, denn ein

Herausgehen wäre eine Veränderung, sie wäre gesetzt als nicht mehr sich selbst gleich. Die Einheit leidet daher auch nicht durch ihr Hervorbringen eine Abnahme oder Verringerung. Die Einheit ist Denken, das nicht eine Abnahme durch Erzeugung eines bestimmten Gedankens erleidet, sondern dasselbe bleibt und das Hervorgebrachte auch in sich erhält.

- (5) Proklos, *Elementatio theologica*, prop. 26. 「他を生む原因となるものはすべて、それ自身の内に留まりながら、それより後のものに続くものを生む。」例えば、我々が精神に持つ「思想」は産み出され他に伝えられても我々の内では減じたり消失したりしない。これに似ている。しかしヘーゲルによればこのような例示は正確な理解ではない[八]。

第二節 否定と止揚

「一九」次にヘーゲルは一からの発出には「否定」の契機が含まれていることを示す。そしてさらにこの「否定」は通常の消極的な意味ではなくて積極的な意味をも持っていることを示す。これはヘーゲル哲学に大きな示唆を与えたのではないだろうか。

そこでまずヘーゲルは、先にあげたプラトン『パルメニデス篇』の「第一の仮定」における「否定」に関するプロクロスの解釈から始める。

「しかしこの際に、プロクロスは、プラトンの『パルメニデス篇』における産出(Produktion)が現れてくる仕方についてひとつの意味慎重な意見をなしている。彼はすでにプラトンの『パルメニデス篇』において産出を見いだしている「プロクロスはこれについて註解を書いた。クーザン編集『パルメニデス篇註解』(第四・六巻)。ここでパルメニデスは否定的方法で(しばしばプラトンでは結果は否定的ではないが)、もし一があるなら、多の存在はない、などと示している。さてプロクロスはこれらの

否定について、これらの否定はそれについて否定が語られたところのもの(『内容の』破棄ではなくて、否定されるものに対立する諸規定の産出である」と言っている。」⁽¹⁾

「二〇」プラトンの『パルメニデス篇』の第一の仮定では

「もし一があるのであれば、その一は多ではありえない。」(拙訳)

と書かれている。⁽²⁾ヘーゲルはこれを

「もし一があるなら、多の存在はない。」

と訳している。このヘーゲル訳は拙訳とは少し異なるが内容的には同じである。⁽³⁾そこでヘーゲル訳にしたがって見ていくことにする。

この条件文には「ない」*kein, nicht*という否定辞が現われているが、この「否定」の意味をプロクロスは次のように解釈する。

「私は否定*antiphasis*の性質について次のように規定する。否定は基体(主語)から欠如しているということではなくて、例えば、対立するものどもを産出することである、云々、と。」⁽⁴⁾

つまり、多の存在が「否定」されるが、この「否定」は、多の存在をいわば帳消しにし棄て去る(除去する)のではなくて、たとえば多の存在に対立する諸規定・諸概念を「産出」するので、とプロクロスは解釈する。これは右のヘーゲルの説明のとおりである。

「二一」ここからヘーゲルは、『パルメニデス篇』の「多の存在はない」を、プロクロスの「否定」の意味にしたがって、かつヘーゲル流に変容もしつつ、次のように解釈する。

「それゆえもしプラトンが第一者は多ではないと示すならば、これは、多は第一者から発出するという意味を持っている。すなわち、もしプラトンが第一者は全体でないと示すならば、一全体性は第一者から外へ出ることなどの意味を持っている。」

（つまり）諸部分の規定である多は一なるもの（das Eine）から外へ出る。これらの否定はたんに欠如したものとして理解され得るのではなくて、肯定的な諸規定をも含んでいる。多性は、経験的に受けとめられて次にただ破棄されるだけではない。⁵ プロクロスによると、プラトンの『パルメニデス篇』における「第一の仮定」の「多の否定」の意味は、①多は第一者から発出する、②第一者は全体ではない、③逆に、全体が第一者から外へ出る、という内容を持っている。したがって「多の否定」は右記の三つの積極的な内容を持っていることが解かる。それゆえヘーゲルは、多性は経験的に受け取られ、次に破棄（除去）されるだけではない、もっと積極的な意味を持っている、と言っているのである。

「二二」次にヘーゲルは破棄されたものに積極的で豊かな内容が見られることを明らかにしようとする。

「へそれゆえ、否定のこの転義的表現は、一（die Einheit）の内にとどまり、万有から発出しそして言い表わすことのできない過度の単純性においてあるところの完全なものとして解されねばならない。完全なもの *téleion* は周りを照らしつつかつそのようにして産出している。その結果、全体は理念上で一なるものに含まれる。へ同様に逆に、神はこれらの否定から再び引き出されねばならない。へこれらの否定は絶対的にとどまるはずはない。へそうでなければ神の概念（*noûs*）はなく、かつ否定もないことになる。言表できないものの概念は自分自身の周りを転がり、休まず、自分自身と戦う。へ——すなわち、一なるものは、理念上で自らの諸規定を据え、それらを止揚しするのである。⁷」

「二三」プロクロスは「否定」とは「完全なもの」であり、そして

その「完全なもの」の内容は、①「一」の内に留まる、②万有から発出し言表できないほどに過度の単純性においてある、ところのものと解さなくてはならないとする。

さらにヘーゲルは、「完全なもの」の内容は、「周囲を照らしつつ産出する」ものである、すると生成された「全体」は、理念として「一」の中にも存在する、と補う。それゆえ、ここでいう「産出」もまた「否定」の内容となつてゐる。なぜなら、「否定」がなければ「一」は「一」のままに留まり「多」の産出はないからである。それゆえ「否定」があるということはまた「産出」もあるということになる。また、プロクロスは、神は、「否定」の内に絶対的には留まらず、そこから転じていく、そうでなければ神の概念も無くまた否定そのものも無いことになる、という、そして「言い表わせないもの」（「一」を言い表わそうとする「一の概念」は、苦心しつつも結局は自分自身の周りを堂々めぐりし、休むことはなく自らと戦うことになる。この状態をヘーゲルは、「一なるものは、理念的に自らの諸規定を置きつつ、しかしそれらを止揚している」とするが、その意味は「一は否定されて理念として諸規定を産出する。そのようにして豊かで積極的なものを産み出す」ということである。

ヘーゲルは、プロクロスのかかる「否定」の中に自ら「*Aufheben*」などの重要な思想を読み取ったと考えられる。

「二四」ヘーゲルは最後に、今迄見てきた「否定」の意味の探究を締めくくる。

「否定は、単純なものと正反対であつて、まさに二分化・分裂を起し産出し活動するものである。このものは同じく否定から引き出されている。そのようにしてかのプラトンの問答法（弁証法）はプロクロスにとってひとつの積極的な意味を持つ。彼は弁証法によつてすべての差異を一へ還元することを意志す

る。プロクロスは一と多のこの弁証法を使って色々と仕事している。とくに彼の有名な『神学綱要』においてそうである。⁽⁵⁾否定は、二分化・分裂、生産、活動つまり発出をなすものである。しかもそれは単純なもの(「一」とは正反対のものである。かかる分化生産活動体—発出体—はまさに右の「否定」から引き出されている。

プロクロスは自らの弁証法をプラトンの問答法から引き出し、そこに積極的な意味を見い出した。プロクロスの弁証法はあらゆる差異(多)を一から発出させ一に還元していく力を持っている。そしてこれがプロクロスの『神学綱要』において実際に展開されている。

註

- (1) Hegel, *op. cit.*, S. 388, Dabei aber macht Proklus eine tiefsinnige Bemerkung über die Art, wie im Parmenides des Plato diese Produktion erscheint. Er findet sie schon im Platonischen Parmenides (Proklus schrieb Kommentar darüber: IV. bis VI. Band von Cousin), wo Parmenides auf eine negative Weise (oft sind die Resultate nur negativ) zeigt, daß, wenn die Einheit ist, das Sein der Vielheit nicht ist, usf. Über diese Negationen nun sagt Proklus, „daß sie nicht ein Aufheben dessen seien, von dem sie gesagt werden (des Inhalts), sondern Erzeugungen der Bestimmungen nach ihren Gegensätzen.“……”
- (2) 前掲拙論「プラトンの『パルメニデース篇』における「第一の否定」」(四頁 [一〇] 参照)。
- (3) ケーゲルが使ったプラトンのテクネーのZweibrücken版 (1781-1786) に記される(「口頭」教授の「指示」を参照)。したがってBur-
netius (1900) は正確である。Platon, *Parmenides*, (ed. Bernet),
137c4-5. $\epsilon\acute{\iota}\ \epsilon\upsilon\ \epsilon\sigma\tau\iota\nu$, $\delta\alpha\lambda\lambda\acute{o}\ \tau\iota\ \nu\acute{o}\kappa\ \alpha\upsilon\ \epsilon\iota\eta\ \pi\omicron\lambda\lambda\acute{\alpha}\ \tau\acute{o}\ \epsilon\iota\nu$.

- (4) Proklos, *theol. Plat. II*, p. 108.

- (5) Hegel, *op. cit.*, S. 388-389. „Wenn Plato also zeigt, daß das Erste nicht Vieles sei, so hat dies die Bedeutung, daß das Viele vom Ersten hervorgeht: daß es nicht ein Ganzes sei — daß die Ganzheit von ihm ausgeht“ usf. Das Viele, die Bestimmung der Teile geht von dem Einen aus. Diese Negationen sind nicht zu fassen als ein bloß Privatives, sondern sie enthalten auch affirmative Bestimmungen; die Vielheit ist nicht empirisch aufgenommen und dann nur aufgehoben. 前掲参照。

- (6) 同掲註(5)の(4)の註を参照。

- (7) Hegel, *op. cit.*, S. 389. „Dieser Tropus der Negationen ist also als Vollkommenes zu nehmen, das in der Einheit bleibt, aus allem herausgeht und in einem unaussprechlichen Übermaß der Einfachheit ist“; das $\tau\acute{\epsilon}\lambda\epsilon\iota\omega\varsigma$ ist unleuchtend und so produzierend, so daß das Ganze ideell in dem Einen enthalten ist. „Ebenso umgekehrt muß Gott diesen Negationen auch wieder entnommen werden“, sie müssen nicht absolut bleiben; „sonst wäre kein Begriff ($\lambda\omicron\gamma\omicron\varsigma$) desselben und auch keine Negation. Der Begriff des Unaussprechlichen wälzt sich um sich selbst herum und ruht nicht und bekämpft sich selbst“—d.h., das Eine setzt seine Bestimmungen ideell, hebt sie such auf. / Proklos, *theol. Plat. II*, p. 109.

- (8) *ebd.*, Das Negative ist eben das Entzweieinde, Produzierende, Tätige, entgegengesetzt dem Einfachen; es ist ebenso der Negation entnommen. So gewinnt jene platonische Dialektik für Proklus eine positive Bedeutung; durch Dialektik will er alle Unterschiede auf die Einheit zurückführen. Mit dieser Dialektik des Einen und des Vielen macht sich Proklus viel zu tun, besonders in seiner berühmten Elementarlehre.

第三節「多」の発出

「二五」次にヘーゲルは、一から多が発出してくる様子を述べる。

「ところでさらに、生み出すものは力の充溢によって生み出す。また、欠乏による生み出しも起こる。もちろん欠乏によってすべての欲求、衝動などは（生み出しの）原因となり、欠乏が生み出すときには欠乏は充足される。目的は不完全であり、完全なものになろうとする目的から活動は由来する。しかし欲求、衝動は生み出しにおいては同時に減少する——衝動はそのようなもの（『生み出しの原因』であることをやめるか、あるいは対自存在が消えるのである。）」¹

生み出すもの（『一』は、その「力」の充溢により、つまり自然に溢れ出るにより、多を生み出す。

しかし「生み出し」はこれだけを取ってみれば必ずしも「力の充溢」によってのみ生じるわけではなく、「欠乏」によっても生じる。「欠乏」によって「欲求」「衝動」等が（生み出しの）原因となる。欠乏によって「欲求」「衝動」等が多を生み出せば、欠乏は満たされる。

この場合、欠乏しているものの目的は不完全でありしたがって不足もしているが、この不完全で不足した目的から、それを満たすべく多を生む活動（欲求、衝動）が生じる。そしてそれが多を生み出して目的を満たせば、その活動（欲求、衝動）は減少し、その結果「生み出しの原因」であることを止める。すると発出は停止する。

「二六」しかし一からの「力の充溢による発出」は、右のような「欠乏による発出」とは異なる。ヘーゲルは一からの発出を、アリストテレスの現実性（*ἐκπύεσις*）と可能性（*δυναμὴς*）の概念を導入しつ

つ、次のように説明する。

「これに対して。一は可能性の充溢によって自分から外へ出ていく（これはアリストテレス的である）。そしてこれらの充溢する可能性はそもそも現実性である。」²

アリストテレスでは、可能性は現実性の対極的位置にある。アリストテレスの神は純粹現実性であって、自然（*φύσις*）に自らの現実性を伝えていく。そして自然の持つ可能性が現実性に変化することによって世界に動が生じる。

ところがヘーゲルによると、プロクロスの一は「可能性の充溢」であるとされる。この可能性は「一」においてはアリストテレスの純粹現実性と同じである。

また、この *dynamis* の語は元々「可能性」に加えて「力」の意味も含まれている。したがってプロクロスでは、「可能性」即「力」の充溢として「一」から多の「外出」（*herausgehen*）が生じる。

以上から、充溢する一の「可能性」は同時に一の「現実性」でもあることになる。この意味ではプロクロスでは、アリストテレスの *dynamis* の「力」の意味に強調が置かれていることになるだろう。

「二七」次にヘーゲルはこの現実性の中身を説明する。

「そこから一のなす発出は、一が自分自身を多様化し純粹の数が発出することにおいて存立する。しかしこの多様化はかの一を破棄するのではなく、むしろ一の仕方（*Einzelheit*）で生じる。この多様化は最初の一を減じることではない。多は一を分かち持つ（『分有する』）が、しかし一は多を分かち持たない。」³

「一が多を発出させること」は「一の現実性」と同じである。「一」が「多」を発出させることは「一」自身を多様化することである。そして一見したところ、「一」は多様化しその一性を失うことになるように思われる。しかしそうではない。生まれ出た「多」は「一」

を完全に放棄してしまうのではない。むしろ「多」は内に「一」を内在せしめ自らの「統一」を保っている(『*enactas*』)。換言すれば、多は一を分有していることになる。

しかし逆に、一が多を分有することはない。なぜなら、一は多に先立ち、「先立つもの」は「後続するもの」に分有されるが、逆に「先立つもの」(『一』)が「後続するもの」(『多』)を分有するとはできないからである。

このように「一」が多様化しても「一」は自分自身を減じることはない。

「二八」最後にヘーゲルは「多の発出」をまとめている。

「ブロクロスは、さまざまな弁証法を用いて、多はそれ自体では存在せず、多の創始者でもなく、また、全ては一へ帰還する、それゆえ、一は多の創始者である、ということを示している。

(しかし)これは明確ではない——つまり自分(『一』)への否定的な関係ではない。われわれは総じてさらにこの(一への)関係について種々の弁証法、議論のうろつきを見るのである。」⁽¹⁾

多はそれ自体では存在しない。しかし仮に「それ自体で存在する多」があるとすれば、それは「純粹の多」「多のアイデア」である。しかし「純粹の多」は無限に分割されていく。その結果、それは現実的には実在することはできないことになる(思惟上では無限分割は可能であるにしても)。したがって、「一般の多」の存在原因は「純粹の多」(『多のアイデア』)ではないことになる。

しかし「一般の多」は現実存在している。ではこの存在原因は何であろうか。全ての「多」は「一」に帰還する。それゆえ「一」が「多」の存在原因となる。「多」の中に「一」が内在することによって初めて「多」は統一を保持し、存在することができるようになるからである。

しかし、ヘーゲルは『プラトンの神学』における「一と多の弁証法」の議論は余り明確ではないと結論づける。

註

(1) Hegel, *op. cit.*, S.389. Das Hervorbringende bringt nun aber weiter durch einen Überfluß der Kraft hervor. Es geschieht auch ein Hervorbringen durch Mangel. Alles Bedürfnis, Trieb usw. wird Ursache, aber durch Mangel; sein hervorbringen ist die Erfüllung seiner. Der Zweck ist unvollständig, die Wirksamkeit entspringt aus dem Zweck, sich zu vervollständigen; aber das Bedürfnis, der Trieb vermindert sich zugleich in der Hervorbringung — der Trieb hört auf, solcher zu sein, oder das Fürsichsein verschwindet.

(2) *ebd.*, Die Einheit geht dagegen heraus aus sich durch die Überfülle der Möglichkeit (das ist aristotelisch); und diese überfließende Möglichkeit ist die Wirklichkeit überhaupt.

(3) *ebd.*, Ihr Hervorgehen besteht daher darin, daß sie sich selbst vervielfältigt, die reine Zahl hervorgeht; aber diese Vervielfältigung hebt jene Einheit nicht auf, sie geschieht vielmehr auf Einheitsweise (*énactas*); diese Vervielfältigung vermindert die erste Einheit nicht. Das Viele hat Anteil an der Einheit, aber die Einheit nicht an der Vielheit.

(4) *ebd.*, S.389-390. Er wendet vielfache Dialektik an, zu zeigen, daß das Viele nicht an sich, nicht Urheber des Vielen sei, daß alles in die Einheit zurückgehe, daß also die Einheit auch Urheber des Vielen ist. Dies ist nicht deutlich — nicht negative Beziehung auf sich, wir sehen überhaupt dann mannigfaltige Dialektik, Hinnudhergehen über diese Beziehung.

第四節 「多」における一

「二九」続いてヘーゲルは「多」に内在し「多」を存在せしめている。「内在の一」について議論を進めていく。

「第二に、多は（真理に）似ていない。この進展（『発出』）においてプロクロスには次の主規定がある、進展は類似性を介して行われ、真理に似ないものはさらに（真理から）遠く離れたところにあると。多は一を分かち持ちはずすが、しかしそれはまた部分的に一であるのではない。」¹

この箇所ではヘーゲルは「真理」という語を使用しているが、それは「一」を意味している。多は、一に「似ていない」、つまり不類似性を持つ。

プロクロスの主規定によれば、多が一から発出・進展してくる際には、類似性を介して行われる。したがって、一に「似ないもの」は一から遠く離れることになる。

右の主規定によると、多は、また、一に「似ていない」から、一から離れていることになる。とは言え、多は一を分有している。しかしこの分有は部分的に一となるような在り方をしているのではない。本質において一となる在り方をしている。

「三〇」それは以下に見る如くである。

「さらに生産されたものは生産したものに似ている。それゆえ、生産されたものはその本質において一をも持っており、したがってそれは自立した単一者（ヘナス）たちである。」²

多は一に「似ていない」と言われていたが、しかしこれは半面の事実であって、残りの半面は「似てもいい」のである。そこで、以下の議論においては「似てもいい」という事実に着目する。

プロクロスの先の主規定（「二九」）から「生産された（『発出した』）もの」は「生産したもの」（『発出源』）に似ている」といういわば系が導かれる。これに従えば、「発出したもの」（『生産されたもの』）は「発出源」（『生産したもの』）に似ていることになる。そしてこの「似ている」とは「発出したもの」が「その本質において一を持つこと」を意味する。

多はその発出においてさまざまな層をなしているが、最初に発出してきた「多」は「単一者」（ヘナス）と言われる。

プロクロスの「神学綱要」命題六によれば「単一者」は多であるが、「最初に」となったもの³（『真なる存在者』）以下を構成するところの構成基本要素である。換言すれば、同書命題一一六によれば、単一者とは「一者」の系列（reihe）を成しているものであって「分有される一」である。因に「分有されない一」は万有の根源なる「一」である。そして「分有する一」は第二段階の「真の存在者」以下の多である。

「三一」では、この単一者はどのような在り方をしているのだろうか。

「単一者たちは一という原理を自分の内に含んでいるが、互いに異なりもしている——しかしそれらは、いわば第三のものに対してのみ多でありそれ自体では一であるという仕方である。」⁴

まず第一に、単一者は「一」の原理を内在せしめている。しかし単一者は複数あつて、しかもそれらは互いに異なっている。したがって、その各々は第三者に対しては「多」くある。

しかしこの単一者の各々に目をとめれば、その各々は「それ自体で」（an und für sich Einheiten）である。換言すれば「本質的」（die wesentliche Einheiten）であり「自己同一」（Selbst-

heiten)である。

単一者がこのような在り方をしているのはこれが「一」の「系列」であるからにはかならない。

「三」次に、ヘーゲルはこの「単一者」から発出してくる「多」について話を進めていく。これらの「多」は「単一者」から構成されている。

さて、これらの単一者は、より不完全であるにちがいない他のものをさらに生産する。働きは原因に全く等しいが、産み出されたものは生み出したものに全く等しいというわけではない。⁽⁶⁾

「働き・活動」は「実体」から必然的に出るものであるが、この「働き・活動」はその「実体」に付随しその「実体」に固有である。ヘーゲルはこの事態を指して「働き・活動は原因に全く等しい」という。

「三三」しかし原因から出た結果はそうではない。

「(単一者)に最も近いこれらの一は、全体的なものである。すなわち、もはや本質的な一でも自己同一の一でもなく、一がそれらの付帯性にすぎないようなものである。そのようにして諸生産は常に一からますます遠ざかり、一の分与もいっそう少なくなる。」⁽⁷⁾

しかし、活動—実体の関係とは異なって原因—結果の関係では、つまり「単一者」を原因としてそこから結果として「産出されたもの」は「単一者」(原因)よりもより不完全なものとなるゆえに、⁽⁸⁾「産出されたもの」(結果)は「産出したもの」(単一者=原因)に全く「等しい」というわけではなく、逆に「劣る」のである。

「単一者」から「産み出されたもの」は「単一者」に「最も近いもの」である。そしてこれらは「一つのもの」(＝単一者を分有して

いるもの)であり、かつ全体的なものである。だが、これは「本質的な一」でも「自己同一の一」でもなくて、一を「付帯性」として、つまり、ひとつの「性質」(「一」という性質)として持っているに過ぎない。

このように生産(＝発出)によって「生産されたもの」は常に一から遠ざかる。そして生産が段階を追って重なるに比例して「生産されたもの」は「一」の分与も少なくなっていくのである。

註

- (1) Hegel, *op. cit.*, S. 390. Das Viele ist zweitens unähnlich. In diesem Fortgang ist dem Proklus eine Hauptbestimmung, daß er durch die Ähnlichkeit geschehe und das dem Wahren Unähnliche weiter abliege. Das Viele hat an der Einheit teil, aber zum Teil ist es auch nicht Eines.
- (2) *ibid.*, Das Erzeugte ist ferner dem Erzeugenden ähnlich; es hat daher auch die Einheit zu seinem Wesen, es sind mithin selbständige Henaden.
- (3) Prolos, *Elementatio theologica*, prop. 6,
- (4) Prolos, *Elementatio theologica*, prop. 116,
- (5) Hegel, *op. cit.*, S. 390. Sie enthalten das Prinzip der Einheit in sich, sind aber auch verschieden — Viele, aber so, daß sie gleichsam nur für ein Drittes Viele sind, an und für sich sind sie Einheiten.
- (6) *ibid.*, Diese Henaden erzeugen nun wieder andere, die aber unvollkommener sein müssen. Ganz gleich ist die Wirkung der Ursache, das Hervorgebrachte dem Hervorbringenden nicht.
- (7) *ibid.*, Diese nächsten Einheiten sind Ganze, d.h. solche, die nicht mehr wesentliche Einheiten, nicht Selbsttheilheiten sind, sonde-

rn an denen die Einheit nur Akzidenz ist. So entfernen sich die Erzeugungen immer mehr von der Einheit und haben weniger Anteil an ihr.
(8) Prolos, *Elementatio theologica*, prop. 7,

結論と残る課題

「三四」ヘーゲルのプロクロスに関する「一」と「多」の基本的な考察は『哲学史講義』のプロクロスの項の第二部で終えられている。そしてこれは *places* を論じる部分（第三部）の出発点となっている。「二」の「第三部」をテキストに即して明らかにすることは今後の課題としたい。

また、以上から解せられるように、プロクロスの「否定神学」はヘーゲルの「弁証法」へと発展させられている、あるいはむしろ、ヘーゲルは、プロクロスの解釈を介してプラトンの『パルメニデス篇』の「否定神学」を受けて、自らの「弁証法」に発展させた、とも解釈することができるであろう。

「三五」さらに、今日の代表的な新プラトン主義研究者ードッズ、クリバンスキー、クリステラ、バイアヴァルテスなどは新プラトン主義の「一」の思想源泉は根本的にはプラトンの『パルメニデス篇』にあると考えている。事実、今日の新プラトン主義研究のひとつの方向は紛れもなくそこへと舵取られている。しかしかかる方向付けは、すでに見てきたように、ヘーゲルによってなされていた。それゆえ、今日の研究者達はヘーゲルに示唆を得て研究を進めてきたことが推測される。ヘーゲルにおけるかかる事情を明らかにすることもまた今後の課題となろう。

しかし右の事実は、種々の批判があるもヘーゲルが史上の各哲学

の本質的な理解と位置付けを極めて有意義にしていることを示唆するものといえよう。この意味でヘーゲルの『哲学史講義』は今日も哲学・哲学史研究者にとってひとつの重要な指針となり得るように思われる。

— 続 —

使用テキスト

G. W. Hegel, *Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie II*, Eurobuch 2 (Westberlin, 1984) 本書はD. Karl Ludwig Michelet による版 (1833) を底本にしている。
Proclus, *The Elements of Theology*, ed. intro. comm. tra. by E. R. Dodds (Oxford, 1963)
Proclus, *Theologie Platonicienne*, ed. tra. par Saffrey et Westerink (Paris, 1968)
Platon, *Parmenides*, ed. by John Burnet (Oxford, 1900¹, 1991)
.....

付 記

* 拙稿は平成七年度文部省科学研究費補助金（一般研究C）による研究結果である。

（平成七年九月二三日受理）